

## 民雄薪伝二手書店の社会的弱者向け学習にみる USR の初心

国立中正大学教養教育センター主任 胡維平教授

### 踏切のそばの暖かな灯り

省道台 1 号は、にぎやかな大都会だけでなく、嘉南平原の普通のいなかを通り抜けていく。258 キロメートルほど南下すると嘉義県の県道 106 号にぶつかり、左折し山に向かっていくと、遠くに丘に建ち並ぶ国立中正大学の建物が見えてくる。右へ曲がり、民雄郷の繁華街に入れば、縦貫鉄道を南北に走る列車があわただしく行き交う。

夕暮れ時、遮断器が上がり踏切を渡ると、観光客の一団が期待に胸を膨らませて左に曲がったところにある駅前有名なガチョウ料理店が立ち並ぶ道、鵝肉街へと入っていく。まっすぐ進んだ右側に一棟の古い建物があり、2 階には明かりが並んで灯っている農協の駐車場のそばのどうということのない街角、かばんを背負った子どもたちや大学生が一人また一人と古本が積まれた広いフロアへと入っていく。左側には、真っ赤な横断幕が高々と掛けられ、「民雄薪伝二手書店 (= 古書店)」と書かれている。

### 不便ないなかで暮らす社会的弱者の子どもたちの苦境

雲嘉地方は台湾の伝統的な農業県であり、全国的にみると、高齢化、学力、平均可処分所得のいずれにおいても長年、全国で最下位である。青壮年人口の流出と、祖父母世代による孫世代の養育、貧困からくる若者の問題は特に憂慮されている。

僻地で暮らす社会的弱者の家庭の次世代の運命を好転させるためには、普遍的で公平な教育が重要であることは明らかである。この点について、長年にわたって政府や地域社会が努力を重ねてきたが、その成果は非常に限定的で、社会的弱者の学童の教育問題は依然として非常に深刻なままである。しかし、大学のキャンパスにいる多くの教員や学生にとって、これを身近に感じることは難しく、変化を起こそうというモチベーションもない。しかし、黄金山氏にとって、自分のふるさとの民雄に暮らす、こうした不遇な天使たちの姿は、身を切られるような痛みを覚えるものであった。

### 教育の火を USR は決してあきらめない

11 年前、黄金山氏は民雄地区での本を読む雰囲気高めようと、民雄農協の建物の使われていないスペースに古本屋の「薪伝二手書店」を開いた。そのころ取り壊し間近だった台北光華商場内の古書店から、すべての蔵書を一気に買取り薪伝に持ち帰ったのだった。

黄金山氏は台北世界貿易センター2号館の館長を退職後、故郷に戻り両親の世話をしながら書店を経営した。郷里の人たちは今でも彼を「黄館長」と呼んでいる。しばらくすると、黄館長はこれらの社会的弱者の子どもたちの本当の問題は、勉強を見てくれる人がおらず、クラスで授業を受けても付いていけず、それぞれの能力に応じて教えてくれる教師がおらず、成績が落ちて自信を失い、勉強をやめてしまうことにあると気づいた。また、生活の基本的な条件として、なかには食事を満足に摂ることさえできない子どももいた。

黄館長は試行錯誤の末、放課後、薪伝で社会的弱者の学童を対象に一对一の補習を無料で行い、地元の国立大学の学生に家庭教師の仕事を依頼し、教師と生徒の食事を無償提供することを決めた。このアプローチによる補習の成果は非常に高く、申し込みにくる社会的弱者の学童の数は増え続けている。必要経費がどんどんかさんでいくほか、安定した講師陣の確保も重要な課題となっている。

黄館長は国立中正大学に「社会サービス学習」制度があることを知り、より多くの大学生が補習授業に携わってくれるよう大学に学外協力組織としての認定を申請した。薪伝二手書店は地元でよく知られた存在で、参加者数は確実に増えたが、人数が不安定で、なおかつ、ほとんどの大学生が補習を行った経験に乏しいという面もあった。

2017年、教育部は各大学に「大学の社会的責任(USR)実践プロジェクト」の実施を申請するよう促した。中正大学では、教養教育センターと理学院の教員を中心に構成されたチームが「種まき・実り・昇華—雲嘉地区小中学校科学教育向上プロジェクト」を実施することになった。このプロジェクトは、地域の基礎科学教育の向上と、都市部と農村部の格差是正を目的としていた。—

そして、プロジェクトチームが現地のニーズを調査、把握したところ、「民雄薪伝」が教師のなり手不足という問題を抱えていることがわかった。そこで、プロジェクトリーダーの胡維平主任と黄館長とが協議し、USRプロジェクトチームが義務教育や心理カウンセリングの経験を持つ教師を採用し、学内に2単位の教養科目「サービス学習：カリキュラムに基づく知識の補習授業への応用」を正式に開設し、補習教師をより安定して確保することに決定した。

この授業を履修する学生は、毎週の授業のなかで社会的弱者の子どもたちへの補習の指導法について学び、話し合い、民雄薪伝二手書店を実践の場とした。そのころこの授業を履修した企業管理学科3年の呉さんは、「最初は他の学生と同じように、単位と履修時間をクリアしたら、すぐにやめようと思っていたが、子どもたちと接するうちに、彼らが変わっていくことにだんだん気づき、自分が意義のあることをしていると感じるようになった」と話す。

黄館長の観察によると、この新しい制度は社会的弱者の子どもたちを対象とする補習の効果を確実に向上させ、人材配置のマネジメント面も比較的順

調だった。また、学期が始まる前に黄館長は事前のトレーニングを実施し、USR プロジェクトチームの教師も補習の現場に来て、社会的弱者の子どもたちの保護者と意見交換してコミュニケーションを図った。薪伝の補習の効果が高まると、地域からの要望も増えた。補習に関する知識・技能習得コースも年を追って1クラスから2クラスになり、今では5クラスにまで増えた。薪伝の補習クラスに携わる中正大学の学生は、年間に10数人だったものが2021年には500人を越えた。

## 支援者の登場

社会的弱者の子どもたち向けに開設した薪伝の大教室には1日百人以上が参加し、運営経費は膨らんでいる。黄館長は数年の間に貯えと退職金を使いきり、自宅を抵当に入れ、借りた資金で支出をまかなっている。USR プロジェクトもクラスの開設の支援に力を入れ、自己資金で教師を確保し、補習を行う学生の保険料を負担し、事務担当の助手を雇い庶務のサポートに充て、社会的弱者の子どもたちの成績アップに向けてフォローしているが、提供可能な資金的支援には限りがある。

黄館長は、薪伝がどれくらい持ちこたえられるのか尋ねられると、いつも楽観的に「この子どもたちを放っておくことはできません。時が来れば、方法は思いつくものです」と答えてきた。2021年始め、多くの主要なメディアが、10年来、薪伝の補習クラスが挙げてきた成果や、心動かされる黄館長の取り組みを大きく取り上げた。台湾の各界や海外の華人から大きな反響があり、この時から薪伝には各方面から資金的な援助が次々に寄せられるようになり、ようやくしばらくの間の見通しが立った。

## 風は草をなびかせ、成果は広がっていく

黄館長には、薪伝の経営が非常に困難だった時から思い描いていたことがある。将来、薪伝の経験を全国の必要としている地域に広げるということである。当時は、実現には程遠い目標であるかに思われたが、わずか1年の間に、地域の人たちの尽力と公益団体のサポートにより、嘉義県の水上と大林で支部が相次いで発足した。

数年前までは、中正大学USRと黄館長は薪伝の存続に向けてともに努力していたが、今ではすでに薪伝二手書店は台湾の社会的弱者の子どもたちの補習クラスの代名詞となっている。振り返ってみれば、隔世の感がある。ここ最近では、政治家たちがやってきては何ら約束するでもなく、メディアはつかみどころのない表面的なレポートを行い、組織や団体は競って恩恵に与かろうとする。黄館長とUSRプロジェクトは共通認識として、社会的弱者の子どもたち向けの補習の取り組みが世俗的な干渉をできるだけ受けないように心掛けている。

中正大学 USR プロジェクトは、僻地教育の改善という初心に立ち、補習を行う教員の供給や専門的なトレーニング、事務的なサポート、効果分析などの側面から、全力で薪伝と協力している。大学生のサービス学習カリキュラムを実際に社会的弱者の学童の世話をしたり学業の補習にしていくとともに、大学に専門的な教員による科目を開講し、大学の教員と学生が地元の学童向けに行う教育業務が効果的に根を張り、さらには花を咲かせ、葉を散らすようにするのが、「種まき・実り・昇華」という USR プロジェクトの目標である。…黄館長によると、現時点で、新竹、台中、台東などでも薪伝の支部発足に向けた準備が始まっている。USR プロジェクトチームも現地の協力大学に対して、関連するサービス学習の制度とカリキュラム、実施の体験を積極的に提供し、社会的弱者の子どもたちを対象にした薪伝の補習の成果が全国各地の片隅に順調に広がるようにサポートしている。

民雄駅から県道 106 号を曲がると、農協の 2 階の明かりはまばゆく灯り、薪伝が地域の教育に掛ける限りない愛情を表し、象牙の塔を出た大学生と社会的弱者の子どもたちの好ましい相互関係を映し出している。踏切を渡り、台 1 号線を過ぎると、山への途中にある中正大学では USR の灯が明るく輝いている。

### 薪伝で行われている一対一の補習授業の様子





USR プロジェクトの自主製作動画：<g id="3"><https://www.youtube.com/watch?v=a3UTNL4dyxs></g>